
アガメムノンの結婚

松 田 治

1. はじめに

英雄色を好むという表現がいつごろ始まったのか知らないが、わが国でこれの実例としてよく引き合いに出されるのは豊臣秀吉とか徳川家康などが筆頭であろう。せせこましい現代の世の中ではこのような人物は見出しがたい。表現の意味するところを真理と断定できるかどうか分からないが、西欧世界に目を転じれば似たような人物は枚挙に暇はない。古代ローマのカエサル（シーザー）しかり、近くはナポレオンも同類であろう。歴史上の人物に限らずこれは神話の世界でも当てはまる。

ギリシャ神話ではなんとといっても怪力無双の英雄ヘラクレスにとどめをさす。彼はオイタ山に積み上げられた薪の山を葬壇にして燃え盛る炎に包まれて死に、神々の世界へ旅立った。この世における彼の死は、他の女性に向けられた彼の気持ちを恨む妻によってもたらされた。ある時、ヘラクレスは妻ディアネイラと子供を連れて旅をしていて、川にやって来た。渡し守はケンタウロス族の一員であるネッソスだった。英雄は先に川を渡り、次に妻を船で渡すようネッソスに頼んだ。美しい女性を運ぶ段になって誘惑にかられたネッソスはこれを犯そうとする。彼女の叫び声を聞き、目ざとく見つけた英雄は、ネッソスが川から出てきた時にこれを矢で射殺す。いまわの際にネッソスはディアネイラに薬を渡す。「ご主人が他の女性に心移した時、この薬をご主人の着衣に塗りなさい。これは媚薬だから、ご主人の気持ちは再びあなたのもとに戻ります」と悪党は言った。ディアネイラは自分を犯そうとして殺された男の言葉を真に受けてしまった。

しばらくたった後、ヘラクレスは他郷にあり、イオレという女性に愛情を傾けていた。その土地で、戦勝を感謝すべくゼウスに神殿を捧げることになり、新しい服が必要になった。ヘラクレスはその服を取って来るよう使いを妻のもとに派遣する。そこでディアネイラは服に薬を塗りつけたのである。後は、ネッソスの毒に身を焼かれた英雄の死へと急転直下、げに恐ろしきは、の見事な一例だが、ついでに言えば、ディアネイラ自身は、自分が何をやってしまったかを知って、自殺する¹⁾。

トロヤ戦争で活躍する英雄たちは、活動範囲やその他でスケールの点ではヘラクレスにはるかに及ばない。それでもトロヤ戦争の話は壮大な戦争絵巻であり、登場する英雄たちの行動はそれなりに派手で、この戦争を語り伝えている『イリアス』は読む者を倦ませない。主な人物としては、アキレウス、オデュッセウス、アガメムノン、メネラオス、アイアス、ディオメデスなどが挙げられ

る。この物語は10年にわたる戦争の最後の1部分を語るにすぎないが、それはアキレウスの怒りに端を発する紆余曲折であるから、主人公はアキレウスであり、他の英雄たちは脇役である。アキレウスはギリシャ軍随一の戦士であり、オデュッセウスは知謀において並ぶものはない、と述べられている。この2人に比べて、また他の重立った英雄らに比べても、ホメロスの語るアガ멤ノンの有り様はだいぶ分が悪い。軍の総司令官という高い地位にありながら、アガ멤ノンは人間的な様々な弱点を持つ人として述べられていて、つまりは、アキレウスやアイアスのような直線的な英雄ではないのである。

そもそもアキレウスの怒り自体、アガ멤ノンの我欲によってもたらされた。その件りの語りで彼の負の性格が明らかになる。その顛末を簡単に述べよう^②。トロヤと戦う合間に英雄たちは兵を率いて近隣の土地を攻め、略奪をこととしていた。攻め落とされた町から若い女性らが捕虜としてギリシャ陣営にもたらされる。アガ멤ノンはそういう乙女の1人クリュセイスを得ていた。この乙女の父はアポロンの神官で、ギリシャ陣営へ来て娘の返還を懇願した。アガ멤ノンは剣もほろろの言辞を弄してこの父親を追い返す。落胆した彼は守護神アポロンに復讐を懇請する。これを聞き届けた神は弓矢を手にしてオリュポスを駆け下りギリシャ軍に矢を盛んに浴びせ、兵士らを薙ぎ倒す。軍では事態の收拾を計って会議が催され、その席で古い師カルカスの口から「アガ멤ノンが神官を侮辱したことが非常事態の原因である」ことが明らかにされた。最良の策はクリュセイスを親許に返すことで、これをアガ멤ノンは承知した。これで済ませればアガ멤ノンもいわゆるいい男になったのだが、後がいけない。彼はアキレウスに「その代わり、お前が分捕った娘ブリセイスを俺によこせ」と迫り、これを実行してしまった。アキレウスは嚇怒した。今の言葉でブツツンしてしまい、戦場を離脱したのである。この会議でのアキレウスのせりふのごく一部を紹介しよう。

ああ、なんたる厚顔、なんたる強欲のお人か。いかなるアカイア人があなたの命のままに唯々諾々と、使いに立ったり敵と戦ったりするであろう。(中略) 我らが世にも恥知らずなあなたに従ってきたのはあなたの意に添うため、つまりはメネラオスならびにその厚顔無恥、犬にも似たあなたのためにトロイエ人から償いを得るためであった^③。

アガ멤ノンはこういう曲がりくねった英雄なのである。小稿の目的は、しかしこの英雄のこのような性格を記述研究することではない。筆者の胸中にはアガ멤ノンという英雄の神話的生涯を辿ってみたいという遠大な計画がある。放浪を続ける青年時代、王者としてアルゴスを支配する時代、トロヤ行を目前にしてアウリスで足踏みする日々、トロヤでの戦争指揮、そして帰国して迎える無残な死、簡単に記せばこれがアガ멤ノンの生涯である。これを各時期、各地域ごとにある程度つまびらかに見ていこうというつもりである。従って小論はこのアガ멤ノン論の言わばプロローグの役割を果たすことになり、悲劇的な死に反比例してあまり知られていない青年時代を掘り起こし、そこに後年の悲劇の原因を求める試みを目的とするものである。名声嚇々たる英雄は妻とその愛人の手にかかって惨殺された。なぜそのような事態にたち至ったのか。まずは名前から始めよう。

2. 名前

ニルソンによれば、ギリシャ神話に登場する人物で、-eusで終わる名前の者は古い時代に属し、それ以外の者は新しい時代に属するという。以下に書き分けて見よう。

Peleus, Achilleus — Neoptolemos

Odysseus — Telemachos

Atreus — Agamemnon, Menelaos

Tydeus — Diomedes

Neleus — Nestor

Oineus — Meleagros

左側が父親 (Peleusはアキレウスの父)、右側は息子とされている。-eusの名前はしばしば語源を探るのが困難であるが、これに対して息子たちの名称はありふれた合成名称で、分解して説明するのは容易であるとされる。ニルソンは次のように言っている。「-eusで終わる系列に属する名前を持つ英雄たちは、明らかに、ありふれた名前の英雄たちよりも前の時代にさかのぼり、この言語学的事実には、後者が前者の子供、子孫であると言われるという神話学的事実が対応する」⁽⁴⁾。ニルソンの言いたいことは、要するにこの古い名前を持つ英雄たちがいわゆるミュケナイ時代にさかのぼらしいということであるが、これは我々の論題とはかかわりはない。アガ멤ノンという名前が新しい時代の英雄に与えられたものであることを認識すれば十分だ。ニルソンの驥尾に付してこの説を述べている学者としてカークがいる。彼もニルソンと同じような英雄たちの名前を論じているが、アキレウスとその父ペレウスを分けて考える点に新味がある。つまり、アキレウスは古いグループの一員であり、彼の置かれている神話的分脈から示唆されるような新しい準伝説的なタイプではない。これに対して父親のペレウス (Peleus) は中間的であり、このことは、その名前が、恐らく前ギリシャ期のものであるペリオン山 (Πήλιον) の名前に基づいていることから分かる、とカークは説明している。「-eus型の名前の英雄たちは、別してギリシャ的な合成された名前をもつ息子に恵まれることが分かっている。たとえば、アガ・멤ノン (Aga-memnon) はアトレウスの子であり、ネオ・プトレモス (Neo-ptolemos) はアキレウスの子である」⁽⁵⁾。

この合成された名前については、すでに古代ギリシャ時代にプラトンが次のようなことを述べている。

「実際アガ멤ノン (という名前) は、おおいに勇敢に自分の計画を実践しながら、頑強に決意をとことんまでやってのけることの出来る男をうまく表している。その証拠はトロヤを前にしての彼の軍隊の長期滞在および頑強さにある。この男が、その粘り強さ (epimone) によって、素晴らしい (agastos) ことは、Agamemnonという名前が示すところである」⁽⁶⁾。

哲学者プラトンがアガ멤ノンという英雄をどう見ていたかを如実に伺わせる面白い文章である。名前をAga・memnonと二分し (この名前が合成されたものであることは紀元前5世紀では常識的に知られていたものと思われる)、Aga⇔agastos, memnon⇔epimoneとして2部分の由来を解釈している。

前半部のAgaを説明する ἀγαστός には確かに「良い、立派な、気高い」などの意味を持つ ἀγαθός と共通の語根 αγα- があるので、これは有効な説明であろう⁷⁾。プラトンが後半部の語源にしている ἐπιμονή は「居残ること、待つこと、ぐずぐずすること」といった意味合いの言葉で、哲学者がこの言葉を10年間もトロヤで粘り強く戦ったアガメムノンの美質を表すものとしてここで使用していることは明らかである。しかし、一見して語形が違いすぎるのもまた明らかだ。恐らく、memnon の memn- と、epimone の -mone の子音の類似から両語を結びつけたものであろう。この結合は素人目で見ても無理がある。

それなら言語学的なきちんとした解釈があるかと言えばそうでもない。フリスクによると、アッティカ壺絵には、Ἀγαμέσμων, Ἀγαμέμμων, -μέν(ν)ων といった名前も残されているという。語源についてフリスクは確固たる自説を出さず、両論併記で逃がっている。

1) *Αγα-μέδμων「強力に支配する」から出た (Prellwitz の説)

2) 後半部は μένος「力、体力」、μένειν「とどまる、待つ」から出た (Kretschmer, Curtius の説)⁸⁾

こういう次第でアガメムノンという名前の由来についてはこれといった明確な結論はない。ただ、このように色々な説を並べてみると、トロヤで10年間粘り強く戦ったという神話的事実から、力強く・頑強に戦った戦士を表すものとして、人物像に合わせてできた言葉ではないかという思いが残る。

3. 系譜

系譜は様々なことを語ってくれる。これを見ていると、たとえ神話的な人物であっても、まるである時代に実際に呼吸をしていた人間であったかのような錯覚を我々は覚えるのである。これは神話を語り伝えた古代の人々の、その神話に寄せていた様々な思いが力強く我々の心を捕らえるということであろう。先祖代々の諸々の神話的事実が積み重なって当人に継承され、ある場合はそれが当人の力になることもあれば、またある場合は当人を破滅に導くこともある。アガメムノンの場合は破滅であった。アガメムノンの系譜を語ることによっていよいよアガメムノン伝が始まることになる。

ピエール・グリマルによれば、アガメムノンは、アトレウス一族の者、ペロプス家の者、あるいはタンタロス族の者として示されるという⁹⁾。我々が『イリアス』第一巻を調べた限りでは、アガメムノンは、3つの方法で名前を呼ばれている。単にアガメムノンと呼ばれることもあれば、アトレウスの子アガメムノン、あるいはアトレウスの子とされる場合もある。この第一巻ではグリマルの言う「ペロプス家の者、タンタロス族の者」といった呼称は見られない。もう1つ、弟メネラオスとまとめて「アトレウス家の2兄弟」と呼ばれることもある。

Ἀτρείδα δῶν がそれで、これは3例数えられた¹⁰⁾。

「アトレウスの子」という表現が弟メネラオスを指す例は第一巻には見当たらない。さてこの「アトレウスの子」であるが、原文では2つのギリシャ語の形が見られる。

1) Ἀτρείδης⁽¹¹⁾2) Ἀτρείων⁽¹²⁾

1) の例が圧倒的に多い。「アトゥレイデース」と読めるこの語の語根はむろん Ἀτρεΰς であり、すなわち、これがアガメムノンの父アトレウスの名前である。この呼び方のテキストの実例を1つだけ挙げておこう。

ἦρως Ἀτρείδης εὐρὺ κρείων Ἀγαμέμνων (102) アトレウスの子、広大な国土を統べる勇士アガメムノンが (松平千秋訳)

こうして『イリアス』でアガメムノンの父がアトレウスであることは明らかであるが、このようなことは常識的に知られていることである。父から祖父へ、さらにその先へと系譜を辿るのも1つの方法であろうが、それでは語られるべき当人から話が遠ざかっていくばかりなので、ここではギリシャ神話で周知されている神話的事実を踏まえて上の方から下の方へ系譜を追うことにしよう。

アトレウス家の家祖はペロプスである。むろんペロプスにも父親はいるわけで、これはタンタロスであるが(このことから、ペロプス以下アガメムノン、メネラオスまではタンタロス一族と一括される)、タンタロスの父親は実にあのゼウスであり、彼自身神に近い存在なので、はっきり人間としてとらえられるペロプスから話を始めるのが妥当であろう。タンタロスの子として生まれたペロプスは小アジアの出身であるが、後にギリシャ地方に移住した。彼について特筆すべきエピソードは2つある。1つは幼いころ父親の出来心から一度死んでしまったこと、もう1つはヒッポダメシアとの結婚である。父タンタロスはこの息子を殺して切り刻み、料理して神々に供した。この不可解な犯罪の動機はいくつか取り沙汰されてきたが、最も一般的なのは、彼が神々の叡知を試そうとしたというものである。神々は供された肉の正体を認識し誰も食べなかったが、デメテルだけは、たまたまかついていたので、気づかぬうちに一方の肩を食べてしまった。ペロプスを哀れんだ神々は彼の体を元に戻し、生命を取り戻させてやった。食べられた肩には象牙の代用品が嵌め込まれたとのことである。タンタロスは神々を恐れぬ所業の罰をたっぷり受けることになる。

次はヒッポダメシアとの結婚の話である。再生したペロプスは大神ポセイドンに愛された。そのため彼は天界で大神に仕えたが、やがて地上に戻された。それでも大神の保護は続き、オイノマオスとの争いでもこの保護をかたじけなくした。オイノマオスがヒッポダメシアの父親である。オイノマオスはエリス(ペロポネソス半島北西部)の町ピサを支配していた。娘のヒッポダメシアは余りにも美しく、若い求婚者がひきもきらなかつた。なんらかの理由で父親はこの娘を嫁にやることを嫌い、若者たちを排除するのに馬車競争を利用した。コリントスのポセイドン神殿を目標点にして馬車を走らせるのである。王は素晴らしく脚の早い馬を飼っていたので、決して負けなかつた。彼は競争に敗れた者の首を撥ね、それを門前に吊して恐怖の見せしめにした。

ある日ここへペロプスがやって来た。その美貌に魅せられたヒッポダメシアはたちまち恋に陥ち、何がなんでも美しい青年に競争に勝って欲しいと思い、父の御者ミュルティロスを買収した。競争当日、ミュルティロスはオイノマオスの馬車に仕掛けをし、そのため走っている最中に王の馬車は

こわれ、王は死んだ。3人は馬車を駆って逃走した。その途中、なんらかの理由でペロプスはミュルティロスを殺害した。その理由は多岐にわたるのでいちいち言及しないが、ミュルティロスは身分もわきまえず、しかし並みの青年らしく、美しい王女に恋慕していた、たとえば、美女をはさんだ三角関係的な状況が見てとれる。大切なことは、殺される時にミュルティロスがペロプスの家に呪いをかけたことである。この呪いはこの一族を襲う数々の酸鼻な事件の原因となる⁽¹³⁾。

2人の間には多くの子供ができたと伝えられているが、その中で重要なのはアトレウスとテュエステスである。ペロプスを後継して家をアガ멤ノンに渡すのはアトレウスなので、ここではアトレウスを中心に語ることにする。アトレウスが兄、テュエステスは弟である。ペロプスは妻以外の女性との間にクリュシッポスという男児をもうけていた。母ヒッポダメイアに要請されて、アトレウスとテュエステスはこの異母弟を亡きものにした。ペロプスはクリュシッポスを殺害したこの兄弟を追放した。2人はミュケナイへ逃れた。当時ミュケナイでは王のエウリュステウスが子のないまま死に、王座が空席の状態にあった。「ペロプスの1子を王にせよ」という神託がミュケナイ市民に示された。ここから2兄弟の間に権力をめぐる確執が始まる。アトレウスは自分の家畜の中に黄金の毛をした羊を見つけ、その皮を剥いで保存していた。本当は女神アルテミスに捧げるべきものであった。彼の妻はアエロペといい、不埒なことに、夫の弟テュエステスを愛人にしていて、アエロペは夫が秘蔵していた黄金の羊毛を盗みだし、これを愛人に与えた。市民を前にしての論争でテュエステスは「黄金の羊毛を見せることのできる者を王にせよ」と提案し、受け入れられ（アトレウスはまだ自分が所有者だと思っている）、かくしてやすやすと王座を手に入れた。ここで神々の王ゼウスが介入し、アトレウスに「もし太陽がコースを逆行すれば自分が王、さもなければそのままテュエステスが王になる」と提案するよう入れ知恵する。テュエステスがこの提案を呑むと、さっそく太陽は東に沈んだ。こうしてアトレウスはミュケナイの支配権を決定的なものにした。アトレウスは急いでテュエステスを追放した。しかし時ならずして妻とテュエステスの関係を知るや、彼は和解する振りをしてテュエステスを呼び戻した。アトレウスは密かにテュエステスの3人の息子を殺し、切り刻み、煮込み、和解（のつもり）の宴席で、料理として3人の子の父親に供した。テュエステスが食べた後、アトレウスは子供たちの首を親に見せ、何を食べたかを知らせた。テュエステスは再び追放された。3人の子供を殺された親の憤怒は大きく、後は復讐を画策するだけである。彼はコリントスに近い町シキュオンに逃れ、神託に従って、自身の娘と睦み、子供をもうける下地をこしらえた。その後すぐにこの娘は自分の叔父であるアトレウスと結婚し、月満ちて生まれてきた男の子を捨て子にした。幼児は羊飼いらに拾われ、山羊の乳で育てられた（山羊という名詞がアイギストスという名前の語根とされている。αἴξ, αἰγός; Αἴγισθος）。アトレウスはこの子供を捜し出して自分の子供として育てた。これが成人すると、アトレウスはこの青年にテュエステスを殺すよう密命を与える。テュエステスの許へ赴いたアイギストスはすっかり実情を把握し、ミュケナイに戻り、アトレウスを殺害し、テュエステスに王座を与えた⁽¹⁴⁾。

アトレウスとアエロペの間に生まれた子供が、アガ멤ノンとメネラオスの2兄弟である。上で略述したように、アガ멤ノンはずでに祖父、親の代からの赤黒い返り血を全身に浴びて生まれてきたようなものである。

4. クリュタイムネストラ

神話を語る際に時間とか時期のつじつまを合わせるのはなかなか難しい。それに場所の特定も困難な場合が多い。いつ、どこで、何をという問題である。神話なのだから現実世界の事実を語るような正確さは不要だとも言えるが、ギリシャ神話のように人間性を帯びた物語となると、やはりある程度の整合性を求めたくなる。ケレーニイが次のようにつぶやいている。「英雄神話の個々の物語を、矛盾のない、ただ一つの長篇の物語にまとめあげることは、古き時代の語り手たちもいまだ成功したためしはなかった。とくに、どの出来事が同時に起きたのか、どれがさきか、どれが後に起きたのかという点になると、必ずといってよいくらいはっきりしない」⁽¹⁵⁾。

アガメムノンにとってテュエステスは叔父、アイギストスは従兄弟である。アイギストスがアガメムノンの父アトレウスを討って、親子でミュケナイの支配権を握ったところまでは前節で述べた。当然、アガメムノンとメネラオスの兄弟はミュケナイにはいられない。追放されたことになる。2人の放浪時代である。彼らはどこへ行ったのか。ここでテュンダレオスなる人物が登場する。ミュケナイを追われた兄弟はスパルタへ逃れたものとされている。テュンダレオスはこのスパルタの王であった。彼がスパルタの王になるについては平坦な道はなかった。もともとこの国の王子の1人であったが、父親の死後、兄弟ヒッポコオンとの権力闘争に敗れて追放され、カリュドンの王テストイオスの許に逃れた。ここで王女レダと結婚した。後にヘラクレスがある理由でヒッポコオンを殺し、カリュドンからテュンダレオスと呼び寄せ、スパルタの王権を彼に授けた⁽¹⁶⁾。それでは、なぜアガメムノンとメネラオスはスパルタへ逃げたのか。このくだりを明確に記した資料は見当たらない。様々な物語を克明に書いた神話作家アポロドロスも、ミュケナイでアイギストスがアトレウスを殺害して父親(テュエステス)に王権を与えたと述べた後、すぐに、「アガメムノンはミュケナイ人を支配して……」と続けている⁽¹⁷⁾。ここは、アポロドロスのこの部分に付せられた高津春繁氏の訳注に頼る以外に方法はないようだ。次のように述べられている。「しかし、アガメムノンをその乳母がメネラオスとともにシキュオンの支配者ポリュペイデスの所に連れて行き、ポリュペイデスはまた彼をアイトリア人オイネウスの所に送った。暫く後テュンダレオスは彼らを再び(ミュケナイへ)帰国せしめ、彼らは、ヘラの祭壇に逃れたテュエステスにキュテリアに住むことを誓わせた上でこれを追放した」⁽¹⁸⁾。グリマル教授は同じ部分をこのようにまとめている。「テュンダレオスはアトレウスの息子たちの伝説で一役果たしている。アトレウスの死後、メネラオスとアガメムノンの乳母が、子供たちをシキュオンの王ポリュペイデスの所へ送った。ポリュペイデスは2人をカリュドンの王オイネウスに託した。(その頃テュンダレオスはカリュドンにいた—引用者注)。テュンダレオスがカリュドンからスパルタへ戻った時、彼は2人の子供を連れて行き、自分の家で育てた」⁽¹⁹⁾。2つの説明はおおむね合致していると言えよう。この中で目をひくのは乳母の介在である。乳母と言えば、その仕事は幼児の世話をすることであるから、このあたりではアガメムノンとメネラオスはまだ自助力を持たない子供だったことになる。ここから2人の年齢が問題になり、物語の中でいささか時間的な矛盾が生じることになるが、しかしこの際これも神話的時間と考えることにして先に進もう。

大事なのはともかく2人の兄弟がテュンダレオスと出会うことである。両者の間には姻戚関係などのつながりはなく、地域的に同じペロポネソス半島にいただけのことらしい。2人がテュンダレオスの王家に来たことによって、運命的な2つの出会いがなされることになった。1つは、アガ멤ノンとクリュタイムネストラの出会い、もう一つはメネラオスとヘレネのそれである。

クリュタイムネストラとヘレネは、テュンダレオスとレダの娘である。彼女らには双子の兄弟がいて、個別にはカストル、ポリュデウケスと称されたが、2人まとめてディオスクロイとも呼ばれた。これは「ゼウスの子供たち」という意味の名称で、これで分かるように2人はゼウスとレダの間に生まれ、人間の父親としてのテュンダレオスに育てられた兄弟である。彼らの誕生神話は本筋と関係ないので割愛する。

弟とともに王家で成人したアガ멤ノンは、クリュタイムネストラと結婚する。しかしこの結婚はきわめて異常な形で成就された。ケレーニイはクリュタイムネストラとヘレネのことを「もっとも危険な二人の娘」と呼んでいる⁽²⁰⁾。周知のとおり、ヘレネは後にトロヤ戦争の直接的な原因を作った人物である。彼女の女神としての危険性、人間女性としての危うさについてはすでに論じたことがあるので、ここでは触れないことにする⁽²¹⁾。いっぽう、クリュタイムネストラの方は、ヘレネとは違って、あくまでも人間女性として語り伝えられており、その危険性というのは、その美貌および鋭すぎる知性ということになろう。その当たりのことは、悲劇詩人らの書き残した彼女の言動を見ればよく分かる。とりわけ、この「危険」は、トロヤから帰国した夫アガ멤ノンに対して致命的な形で襲いかかるのである。

実はクリュタイムネストラは、アガ멤ノンを夫にする以前にすでに別の男性と結婚していた。人間のレベルで言えば、アガ멤ノンはクリュタイムネストラの美貌にどうしようもないほど、取りつかれたのであろう。

膨大な旅行案内書を残したパウサニアス（2世紀後半の作家）は、アルゴス市案内記の中で、市内のある所に、小ぶりなブロンズ容器があると述べ、次のように続けている。「また、一説によると、この容器の中には、タンタロスの遺骨が納めてある。タンタロスにはテュエステスかプロテアスの子で——この両伝がある——アガ멤ノンより前にクリュタイムネストラと結婚した。その先夫がここに葬ってあるとしても、わたしに異論はない」⁽²²⁾。タンタロスという名前は系譜の項でペロプスの父親として挙げたが、パウサニアスが言うのはこれとは別人である。このタンタロス是一般にテュエステスの子とされており、テュエステスはペロプスの息子であるから、テュエステスが自分の子供に祖父の名前を与えたということになる。これがクリュタイムネストラの最初の夫だった。これだけなら一人の女性が再婚しただけのことで何の不思議もない。アガ멤ノンがこの夫婦の間に強引に割りこんできたそのやりかたが異常なものだった。

5. ミュケナイへの道

タンタロス2世とアガ멤ノンは従兄弟同志である。混乱を避けるために、親の名前と子供の名前を書き分けて、従兄弟関係を確認しておこう。

アトレウスの子供：

アガメムノン、メネラオス

テュエステスの子供：

アイギストス、タンタロス

この当時、ミュケナイを支配しているのはテュエステス親子であり、タンタロスもミュケナイにいたはずである。そのタンタロスが、どういう経緯なのかは分からないが、スパルタの王女クリュタイムネストラと結婚していた。そしてアガメムノンは自分の従兄弟の妻であるクリュタイムネストラに横恋慕した。どうしてもこの女性を自分のものにしたいという思いに駆られるほどの強い衝動であった。結局は血が流されねばならない。ミュルティロスの呪いが執念深く続くのである。アガメムノンはタンタロス2世を殺害した。あまつさえ、タンタロスとクリュタイムネストラの間にできた子供まで血祭りにあげた。この夫婦は、並みの人間として考えれば、愛し合っていたはずである。親子の愛情もある。家庭の婦人にとって無理やり子供を奪われ殺害されることがいかにひどいものか我々が痴説を振り回す必要もない。そういう状況にクリュタイムネストラを陥れておいてアガメムノンは強引に彼女と結婚した。彼女の心の深い所にすでにこの頃から癒しがたい恨みが棲みついたと考えられるのである。

悲劇詩人エウリピデスの声を傾聴しよう。アガメムノンの経歴で言えば随分と後のことになるが、ヘレネを拉っし去ったパリスへの復讐を誓った全ギリシャ軍は港町アウリスでトロヤへの出発に備えていた。どうしたものか一向に順風が吹かない。軍船団は出港できない。占い師カルカスの見立てで、総指揮官アガメムノンの女神アルテミスに対する罪があばかれ、その償いにはアガメムノン自身の娘を人身御供として女神に差し出さねばならないということになった。軍全体に対する立場からアガメムノンは私情を殺してこの要求に従わざるを得なくなり、「アキレウスと結婚させる」との口実を設けて、母親（クリュタイムネストラ）ともども娘のイピゲネイアをアウリスへ呼び寄せた。とかくする内に事の真相があきらかになり、クリュタイムネストラは怒り狂って夫を問詰する。その夫婦の間答の一部である。

アガメムノン：

「よかろう、黙っている。嘘を並べて禍いの上に恥を加える必要がどこにある？」

クリュタイムネストラ：

「では聞きなさい。私が洗いざらい話します。

もう遠回しな、曖昧な言い方は致しません。

第一に——私が咎めたいのは先ずこのことです——（1148）

あなたは嫌がる私を力づくで妻にした。

それも前の夫タンタロスを殺してから。

その上、生まれたばかりの赤児を私の乳房から

無理やりもぎ取り、振り回して地に叩きつけたのです」⁽²³⁾。

この父子殺しという二重殺人の罪は重く、アガメムノンは、クリュタイムネストラの兄弟ディオスクロイに付け狙われ追い回される。結局彼はクリュタイムネストラの父テュンダレオスに泣きつき、なんとか取りなしてもらい、和解にこぎつけ、ようやくのことにクリュタイムネストラを妻にした。

エウリピデスのこの部分の記述を「クリュタイムネストラの罪を軽くするために」なされたもの

と指摘する学者もいる⁽²⁴⁾。つまり、生涯の果てにアガメムノンは妻とその愛人の手にかかって悲惨な死を遂げるが、この夫殺しという大罪を少し軽くするために「実は昔こんなひどいことがあったのだ」とクリュタイムネストラ自身の口で語らせたというものである。確かにアガメムノンが青年時代に我が手を血で染めた二重殺人というエピソードを語るのは、我々が知る限りでは、エウリピデスだけである⁽²⁵⁾。ここにエウリピデスがなんらかの根拠を持っていたと見なくてはならないだろう。そして我々は、このエピソードこそクリュタイムネストラが（和解し結婚したとはいえ）胸底深く養い続けた、残忍な夫に対する怨恨の始まりを語るものであり、はるか後年のアガメムノン惨死を説明する第一の原因を教えるものであると解釈する。これで小稿の目的は果たされたものとしよう。アガメムノンの死の原因は、娘イピゲネイアの犠牲だけではなく、彼の若い頃の強引無残な結婚にすでにあったのだ。

アガメムノンはスパルタでクリュタイムネストラと結婚し、誰の力を借りたのかその経緯は不明だが、ミュケナイに戻り、テュエステス、アイギストス父子を追放して、この地の王となった。他方、弟メネラオスは、多数の競争手を排除して、絶世の美女ヘレネを妻に得て、テュンダレオスの位を譲られ、スパルタの支配者となった。次は、ミュケナイ、アルゴス一帯に覇を唱えるアガメムノンが何をしたか、その支配時代にペロポネソス半島に何が起こったか、といったことが語られねばならない。

(まつだ おさむ 社会福祉学科)

注

- (1) アポロドーロス作、高津春繁訳『ギリシア神話』、岩波文庫、1953、109～111頁。
- (2) ここは『イリアス』第1巻を参照されたい。
- (3) Homeros, *Ilias*, 1, 149～160. 松平千秋訳『イリアス』、岩波文庫、1992年、18頁。
- (4) Martin P. Nilsson, *The Mycenaean Origin of Greek Mythology*, University of California Press, 1972, p. 26.
- (5) G. S. Kirk, *The Nature of Greek Myths*, Penguin Books, 1974, p. 146. 辻村誠三、松田治、吉田敦彦訳『ギリシア神話の本質』、法政大学出版局、1980年、163頁。
- (6) Platon, *Kratylos*, 395a～b. Texte établi et traduit par Louis Méridier, Les Belles Lettres, 1961.
Κινδυνεύει γὰρ τοιοῦτός τις εἶναι «Ἀγαμέμνων», οἷος ἄ δόξειεν αὐτῷ διαπονεῖσθαι καὶ καρτερεῖν τέλος ἐπιτιθεῖς τοῖς δόξασι δι' ἀρετὴν. Σημεῖον δὲ αὐτοῦ ἢ ἐν Τροίᾳ μοιῆ τοῦ πλήθους τε καὶ καρτερία. Ὅτι οὖν ἀγαστός κατὰ τὴν ἐπιμονὴν οὗτος ἀνὴρ ἐνσημαίνει τὸ ὄνομα ὁ «Ἀγαμέμνων»
- (7) ただし、現代の学者によれば、ἀγαστός という語は主として物・事に用いられ、人物には滅多に適用されなかったとされる。
A. Bailly, *Dictionnaire Grec-français*, Hachette, 1950, s. v. ἀγαστός.
- (8) H. Frisk, *Griechisches Etymologisches Wörterbuch*, Heidelberg, 1960, s. v. Agamemnon.
- (9) Pierre Grimal, *Dictionnaire de la Mythologie grecque et romaine*, P. U. F., 1951, s. v. Agamemnon.
- (10) *Ilias*, 1, 16; 17; 375.
- (11) *Ilias*, 1, 7; 12 など合わせて18例。

- (12) 1, 387, Ἀτρείωνα.
- (13) ヒッポダメイア自身, ペロプスが他の女性との間にもうけたクリュシッポスという子供を, アトレウスとテュエステスに殺させた, あるいは自分の手で殺したとされる。これを復讐するべく, ペロプスは妻を殺した, あるいはエリスから追放したとされる。ミュルティロスの呪いがほとんど時をおかずペロプス自身の時代に働いたことになる。
- (14) 別の伝承では, アイギストスは, テュエステスを連れてくるよう命令され, ミュケナイで実父と叔父の確執にけりを付けたとされている。
- (15) カール・ケレーニイ著, 植田兼義訳『ギリシアの神話・英雄の時代』, 中公文庫, 昭和63年, 402頁。
- (16) アポロドーロス, 前掲書, 107~8頁。
- (17) 前掲書, 181頁。
- (18) アポロドーロス, 前掲書, 226頁。高津春繁氏によれば, これはFrazerがTzetzes Chiliadesという書物からアポロドーロスのテキストの一部として補足した部分である。
- (19) P. Grimal, *op. cit.*, s. v. Tyndare.
- (20) 前掲書, 402頁。
- (21) 拙著, 『古代神話の英雄像』, 八千代出版, 昭和63年, 233~239頁。
- (22) パウサニアス作, 飯尾都人訳『ギリシア記』, 龍溪書舎, 1991年, 137頁。
- (23) エウリピデス作, 高橋道男訳, 『ギリシア悲劇全集』(9), 「アウリスのイピゲネイア」, 岩波書店, 1992年, 163頁。1148~1152行の原文は以下の通りである。

πρῶτον μὲν, ἵνα σοι πρῶτα τοῦτ'ὄνειδίσω,
 ἔγημας ἄκουσάν με κάλαβες βία,
 τὸν πρόσθεν ἄνδρα Τάνταλον κατακτανῶν,
 βρέφος τε τοῦμὸν ζῶν προσούδισας πέδω,
 μαστῶν βιαίως τῶν ἐμῶν ἀποσπάσας.

(Loeb Classical Library, Arthur S. Wayの校訂・訳による)

- (24) Hans von Geisau, in *Der Kleine Pauly*, s. v. Agamemnon.
- (25) ちなみにアイスキュロスの『アガ멤ノン』ではこのエピソードは一切言及されていない。

The marriage of Agamemnon

Osamu Matsuda

Agamemnon was one of the greatest heroes of the Trojan War. The war was fought, on the side of the Greeks, for the purpose of recapturing Helen, seduced and taken away to Troy by Paris, one of the Trojan princes. Agamemnon was the brother of Menelas, whose wife was Helen, and he was the number one general of Greek army.

At the last moment of his life, after he had returned home from Troy, he was assassinated by his own wife, Clytemnestra. Why was he killed by his wife? Generally the reason of this treacherous murder is said to have come from the fact that Agamemnon sacrificed Iphigeneia, one of their daughters, to the goddess Artemis. This roused her rage, and led her to kill him, they say. But we think it was not the foremost reason of her sanguinary act. The object of this paper is to find out the first cause of the murder of the hero Agamemnon in the marriage with Clytemnestra.

Key words: Agamemnon, Klytaimnestra, Atreus, Trojan War, heroes